

古谷 葵 (タマプロ)

力強いストロークからほぼしる、鮮烈な色彩の万華鏡。

東京芸術大学壁画研究室での修練の賜物か、古谷葵の筆致は、セザンヌに始まるキュビズムを更に自在に、かといって、ローランサンやドローネーの愛らしさ、瑞々しさを忘れない。

今年、東京芸術大学大学院を修了したばかりの新鋭でありながら、その堅牢で、時に老獪な構築力は、大壁面に拡大されてもその緊張感を失わず、鑑賞者の視線を奪い、恣(ほしいまま)にする。

色彩。
石器時代の洞窟の仄暗い闇が、人類初めての火の恩寵を受け、その壁面に、生きとし生けるものを刻印した時に始まる芸術と、常にその傍らにあった色彩が、

いま三万年の時を経て、一直線に、古谷葵のキャンバスに光臨する。

エムゼイアートビーコレクション [エムゼイアートビーコレクション賞]

葛西 由香 (ギャラリー門馬)

ウィットがあり雰囲気がとても良い絵で見た瞬間すぐ魅力が感じられました。斬新な発想と日本画の現代的な解析がとても素敵です。

ジャック・マニヤン [Magnan Jacques Prize]

三浦 光雅 (DMOARTS)

From planning and execution come out what can look like randomness. You can only plan your path and learn to enjoy the result.

しりあがり 寿 (Gallery Q)

I loved the old man so proud of himself. The contrast between his sense of superiority and the decaying burned wood is great.

遠藤 茜 (ファースト・パトロネージュ・プログラム)

Ancestral art applied to daily object. I like the message that adding qualifiers and stickers does not change the reality beneath.

ツツミエミコ [ツツミエミコ賞]

宮原 野乃実

金継ぎをイメージしていたのでまず気になったのですが、漆という視点から見た継ぎと過去の漆と現代をつなぐ行為としての金継ぎの違いに興味を持ちました。本物の漆を使っているわけではないということも作家も意識していたので今後本物の漆の作用が作品に反映されるか否かにも関心があります。

坂爪 遥 (タマプロ)

小さすぎてなんとも温かみのある石槍。何に使うのか？時代を超えて歴史とは関係なく見つめていると石と木という素材を結びつけている糸が気になりました。彫刻を作る作家と知り今後の作品が気になります。3本まとめたしつらえの額装にして頂き飾る場所が見えて来ました。

パトロンプロジェクト 菊池 麻衣子 [パトロンプロジェクト 菊池 麻衣子 賞]

高嶋 英男 (Gallery Q)

高嶋英男さんが伊万里焼の手びねり手法で制作した鳥の焼物から大きな引力を感じて選ばせていただきました。白磁に青の模様が美しく、顔の部分が壺の入口の形のものになっていてミステリアス。2m以上ある作品もあり、それは高嶋さんがお相撲さんのように壺と取組んで制作するというお話も面白かったです。

フェアの数日前に、ヨックモックミュージアムで拝見した、ピカソ晩年の壺を手びねりして鳥にしたセラミック作品ともオーバーラップして惹かれました！最近鳥をモチーフにした作品のコレクションが増えているので、その作品同士のコンビネーションも楽しみです。

伊藤 洋志 [NARIWAI 賞]

藤幡 正樹 (NFTとアートのこれから [符号理論 / Coding Theory])

井上 智治 [CVJ 賞]

熊谷 直人 (CAVE-AYUMIGALLERY)

やさしい気持ちになれそうです。

稲葉 智子 [稲葉智子賞]

大槻 拓矢 (京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)

街中を歩いていると、明確な理由があるわけでも、「目立っている」ということでもないけれど、なぜか気になって目を引かれてしまうイメージや景色、事象に遭遇することがある。大槻さんの作品は、いくつもの作品が展示された賑やかな会場で、まさにそんな風に視界に飛び込んできた。近づいてよく見てみると、なにかの断片、またはなにかを部分的にトレースしたような不明瞭ともいえる図像が描かれていた。鮮明なイメージに慣れきった生活や意識の中に、荒い解像度の世界が突如入り混じったようで一瞬“バグって”しまった。しかしその感覚は、作家が差し出した断片に自身の記憶やイメージーションを結びつけたり、新たな関係性や意味をそれらに見出していくことで徐々に薄れていく。そうして作品とコミュニケーションを図る＝解像度を見る者自らが調整することで立ち現れる世界は、とてもパーソナルで親密で特別なものとなった。

遠山 正道 [遠山正道賞]

藤村 祥馬 (KANA KAWANISHI GALLERY)

コロナやオンライン会議、アクリル板を作品のテーマにしようとする試みはアーティストなら誰でも頭をよぎるだろうが、藤村祥馬「視界良好」はそれらを軽々と超えて飄々とした存在感とユーモアを持って自立している。また、インスタレーションというものは所有や展示が困難だが、本作品はインスタレーションの立体的な平面作品とも呼びたい絶妙な立ち位置を示し、コレクターとしてのチャレンジ気分も小さく賑わせてくれる。お財布にも優しい。本作品を、われわれのオフィスに設置し、もしもビタリとハマったなら、むしろそんな場を持つ私たちを褒めてあげたい。

塩見 有子 [塩見有子賞]

蓮沼 昌宏

加藤 潤子 [加藤潤子賞]

稲田 早紀

自己表現を超えて、命への畏敬と祈りを感じる作品です。筆を重ねるごとにキャンバスから浮かび上がってくる花の姿をそのまま描き止めたかのようです。この時代にこそ求められる作家の創作姿勢に深い共感を覚えました。